

(9) 言葉の力は偉大である

能力は言葉の量と質に正比例

ここでは、「言葉の持つ偉大な力」についてお話してみたいと思います。

アメリカの学者が行なった実験にこういうものがあります。幼児たちに、何匹もの蝶がおさめられている標本箱の中から一匹だけ取り出してこれを観察させます。その蝶は、仮に、黄色い色をしていて縞模様があったとします。幼児たちに蝶を観察させて数時間後に、その蝶を元の標本箱に戻し、多くの蝶の中からそれを見つけさせる、という実験です。

見事に正しくこれを言い当てることが出来た子どもは、必ず“黄色”という言葉と“縞”という言葉を知っている者に限られていた、ということです。“黄色”と“縞”と、この二つの言葉のどちらかでも知らない子どもには正しく言い当てることが出来なかったのです。

それはなぜでしょうか。生きた人間である以上、だれだって“黄色”い色が目に入らないはずはありません。けれども、“黄色”という言葉を知らない者にはそれが意識されず、従って記憶に残らないのです。“黄色”という言葉を知っていて、初めて「この蝶は黄色いな」と思い、その色が目にとまり、それが記憶にとどまるのです。

だから、同じ経験をして、その人の持つ言葉の量とその質の違いによって、その経験から得られる内容が違って来るわけです。言葉を

数多く、正しく、深く理解している者ほど、その経験から獲得する内容が豊富なのです。学校で、同じ時間に同じ学習をしても、必ず個人差が生ずるのも、その根本的な原因はここにあるのです。

アメリカの人間工学研究所が以前に、40万人もの人を対象にこのことを実験したことがあります。その結果、人間の能力はその人の持つ言葉の量と質とに正比例する、ということが証明されました。言葉を正確に、かつ豊富に理解している者ほど学校の成績が良く、また社会においても成功している、という事実があったのです。

昔から、「読み書き算盤」と言われ、それが学習の代名詞でしたが、この考えは基本的に正しかったのです。とりわけ“読み”の力は社会科や理科はもちろん、算数の問題を解くのに欠かすことの出来ない最も基本的な能力です。その“読み”とは「言葉を数多く、正しく、深く理解する」ことの総称です。

(5)でも書きましたが、ドイツの小学校では、三年生までの3年間は、社会科も理科も全くありません。例えば、三年生の一週間の授業時間総数は24時間ですが、そのうちの20時間が「読み・書き・計算」です。残った4時間を、体育・音楽・図工に1時間20分ずつ分け合っているのです。

(学習漢字については、別巻3の「楽しく遊ぶ漢字カード」が五百枚ありますので、本書の「漢字で遊ぼう」を参考にしながら、皆さんの創意工夫の上に、さらに漢字学習を進めてみてください)